読むくすり箱
第163号
平成19年7月
富山県病院薬剤師会
ＤＩ委員会

湿布薬の落とし穴

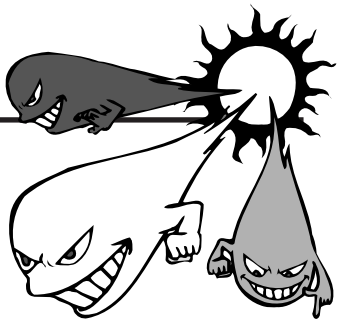
あなたは危険な使い方を
していませんか？

局所の痛みに、ラクラク湿布薬

肩こりや捻挫など、痛い所に手軽に貼れて、効果も塗り薬などに比べて長持ちする湿布薬。手軽に使える分、副作用も軽く見られがちです。湿布薬の副作用といえば、せいぜい湿布かぶれ程度と思っていませんか？

確かに、ちょっとかぶれた程度であれば、湿布をはがして数日もすれば元に戻ることが多いでしょう。ステロイドの塗り薬などを使用すればもっと早く綺麗に治るかもしれません。しかし、消炎鎮痛薬を含んだ湿布薬を貼った後は特に気をつけてください。

光線過敏症



湿布の中の有効成分（非ステロイド系消炎鎮痛剤というカテゴリーの成分）は皮膚から吸収され血液の中に入りますが、その一部は皮膚の中に残ります。湿布をはがすと、血液の中からは速やかに消えますが皮膚の中にはしばらく薬が残ります。そこに日光が当たると、皮膚の中に残った薬が紫外線と反応してアレルギーの原因物質に変化することがあります。すると、湿布が貼ってあった部分にだけ水ぶくれができたり、ひどく腫れて熱を持ったりすることがあります。放置しておくと周りに広がってどんどんひどくなり、皮膚炎が全身に及ぶこともあるようです。このような光によって引き起こされる副作用は「光線過敏症」と呼ばれています。

病院で処方してもらう湿布薬は、ほとんどの製剤に光線過敏症を起こす可能性がありますが、特に「ケトプロフェン」と「ピロキシカム」という成分を含むものは可能性が高いようです。

予防が大事

光線過敏症は日光に当たることで誘発されるので、湿布の貼ってあったところを日光に当てないようにすれば防ぐことができます。しかし、湿布をはがしてから数週間後に発症した方もおられるので、少なくとも４週間は日光を避ける必要があると言われています。それと併せて、紫外線を防ぐサンスクリーン剤を塗るのも良い方法です。薬店の薬剤師などに相談し、湿布薬による光線過敏症と相性の悪い「オキシベンゾン」という成分を含まない商品を選んでもらってください。

起こってしまったら

光線過敏症かなと思ったら、すぐに湿布薬の使用を止め、患部を日光に当てないようにして医師の診察を受けましょう。その際、どんな湿布薬を使ったか分かる物（湿布薬の袋やお薬の説明書など）を持って行くと診断の手がかりになります。一般的には、直射日光を避け強めのステロイドを塗る事が治療の柱になります。症状がひどい場合はステロイド剤の内服や注射が行われることもあります。そして、症状が治まっても医師の許可があるまでは患部を日光に当てないように気をつけましょう。

その他の注意点

起こる確率はとても低いのですが、湿布薬には光線過敏症以外にも「アナフィラキシー様症状」という注意すべき副作用があります。湿布薬を貼ってしばらくしてから蕁麻疹、呼吸困難、顔面浮腫といった症状が現れてきます。また、特に喘息持ちの方は要注意なのですが、湿布薬によって喘息発作が誘発される「アスピリン喘息」という副作用もあります。さらに一度にたくさんの枚数を貼られる方には、解熱鎮痛消炎薬の飲み薬を飲んだ時と同じく胃腸障害や腎障害などの副作用が出る場合もあります。

最　後　に

湿布にも副作用があることがわかっていただけましたか？今回は湿布薬による光線過敏症という副作用を中心に述べましたが、光線過敏症は湿布に特有の副作用ではなく、一部ののみ薬や湿布薬と同じ成分の塗り薬でも起こることがあります。のみ薬の時は、日傘・長袖・帽子などでなるべく全身を日光に当てないように工夫しましょう。普段使っている薬が該当するかどうか分からない場合は、医師や薬剤師にご相談下さい。